

が、遡ればこれにもパルメニデスによる「球形をした〈存在〉」（断片 8.43）の開披を想起することができるだろう¹⁴⁾。ダマスコのヨハネにより『弁証論』のかたちで措定された「ギリシアの賢人たち」の叡智とは、アリストテレスの『形而上学』まで内包することを意図するものであったかどうか、それは判断するすべもない。ただヨハネはアリストテレスの『自然学』（そして『天体論』）を明らかに読破しており、それを 11 世紀の写字生たちは鋭敏に察知していた。こうして、ヨハネのこの知識を反映する『弁証論』は、純粋な神学記述である『信仰詳解』にもまして好まれ、筆写された。アリストテレスそしてギリシア哲学の全容に向かって開く扉とも言える『弁証論』は、復活したイエスをその根幹に前提してこそはじめて生命を帯びるものとなる。そして彼らが共同体として日々執り行う典礼とは、ギリシアの全叡智に対するこの賦活化を証しするための行為でもあったのである。

11-12 世紀における二つの学校

——ベックとラン——

矢内 義 顕

本稿は、グレゴリウス 7 世（在位 1073-85 年）を中心として大規模な教会・修道院の改革が行なわれた 11-12 世紀における二つの学校、すなわち、カンタベリーのランフランクス（1010 頃-1189 年）とアンセルムス（1033/34-1109 年）によって発展したベックの修道院学校そしてランのアンセルムス（1050 頃-1117 年）とラドルフス（1131/33 年歿）によって発展したランの司教座聖堂学校を取り上げ、中世における制度と学知の問題を考える。

14) パルメニデスからプラトン、アリストテレスに至るギリシア哲学の展開については、井上忠『根拠よりの挑戦』（東京大学出版会、1974 年）、『哲学の現場』（勁草書房、1980 年）、および『パルメニデス』（青土社、2004 年）を参照。

I ベックの修道院学校¹⁾

1056年頃、アンセルムスは、父親との確執から生まれ故郷アオスタの町を後にし、渓谷を南に下り、モン・スニ峠を通してアルプスを越える。伝記作者エアドメルスは、アンセルムスが3年近くをブルグンドとフランスで過ごしたと述べる²⁾。ブルグンドとは、フランス王家領となったブルグンド公国を、フランスとは、ロアール渓谷のオイル語地域と以北の地域を指す。前者にはオーセール、オータン、ヌヴェールなどの学校が、後者にはオルレアン、トゥール、アンジェ、シャルトルの学校があった。

それ以前の彼の知的経歴は詳らかではない。アオスタでは下級聖職者であったし³⁾、エアドメルスは、彼が学問に打ち込んだ時期があったことを報告する⁴⁾。ブルグンド、フランスを放浪する間にさまざまな学校の知的な空気に触れたことも確かであろう。しかし、彼はそれらのどこにも留まることなく、ノルマンディのアヴランシュを経て、1059年、ベック修道院の門を叩く。

1. ランフランクスとベックの修道院学校

ベック修道院がノルマン人騎士ヘルルイヌスによって数人の仲間と共に設立されるのは、アンセルムスが到着する25年前のことである。無学文盲だったヘルルイヌスは、修道院の聖務日課に必要なラテン語と聖書の知識を独学で習得する⁵⁾。やがて修道士の数も増え30数名に達した1042年頃、ランフランクスがベックの門をくぐる⁶⁾。イタリアのパヴィアで生まれた彼は、自由学芸と法学を学び、名声を得たが、1030年頃、イタリアを離れ、アルプスを越える。その後の足取りは正確には分からないが、1039年頃、アヴランシュで自由学芸を教えたと思われる。11世紀のトゥ

1) 以下の記述について詳しくは、cf. 拙稿「アンセルムスとベックの修道院学校」(『文化論集』第34号, 2009年3月, pp.1-24):「アンセルムスとアルヌルフス」(同第14号, 1999年3月, pp.35-53):「アンセルムスとマウリティウス」(同第18号, 2001年3月, pp.1-21)。

2) *Vita Anselmi*, l. I, c. v.

3) *Vita Herluini*, 98.

4) *Vita Anselmi*, l. I, c. iiiii.

5) *Vita Herluini*, 27-28.

6) 以下の記述については、cf. M. Gibson, *Lanfranc of Bec*, Oxford, 1978, pp. 1-62; H. E. J. Cowdrey, *Lanfranc: Scholar, Monk, and Archbishop*, Oxford, 1990, pp. 14-66.

ールの聖アベル修道院と12世紀のベックの図書目録には、『ランフランクス
の弁証論理学』(Lanfrancus de dialectica)と『ランフランクスの問題
集』(Quaestiones Lanfranci)が記載され⁷⁾、もし彼がこれらを執筆した
としたら、この頃かもしれない。だが、彼は、何らかの理由から世俗の学
校での栄達の道を棄て、修道生活を志す。

ベックの門を叩いてから3年後、ランフランクスは、副院長に抜擢され、
1063年にカーンの修道院長となってベックを去るまでの20年間、修道院
の管理と教育を引き受けることになる。当初、ベックの修道院学校は、奉
獻された児童やラテン語を知らない修道士を教育する修道院内の学校であ
り(院内学校)、文法と修辞学が教育されたと思われる。彼がプリスキア
ヌスの『文法学綱要』、キケロの『発想論』『ヘレンニウスに与える修辞学
書』を注釈したことは、断片的な情報から知られる⁸⁾。

こうした自由学芸の教育のかたわら、彼は、アウグスティヌスやグレゴ
リウス1世などの教父の著作の研究⁹⁾、そして聖書の研究・注解を開始す
る。1050年代後半のことと思われる。彼の注解は「詩編」と「ヘブライ
人への手紙」を含むパウロ書簡全体に及んだ。「詩編」の理解は修道院の
聖務日課のために不可欠であり、パウロ書簡の理解は、神学的な研究に不
可欠である。彼の『詩編注解』は断片的な形でしか残っていないが、パウ
ロ書簡の注解はすべて残っている。それらは、カロリング朝以来の聖書註
解の伝統を継承しつつも、そこに文法、修辞学のみならず弁証論理学を導
入した点に革新性があった¹⁰⁾。むしろ、論理学の濫用には警告を発する¹¹⁾。
彼は、この姿勢をベレンガリウスとの聖餐論争から生まれた神学的な著作
『主の体と血について』でも堅持し、教父に関する知識と巧みな論理を駆
使するが、この点に触れる余裕はない。

同じ頃、ベックの修道院学校は、修道院の外部からの生徒を受け入れる
ようになる(院外学校)。おそらく、修道院を新築するための資金調達が
目的だったのだろう。ランフランクスの名声は多くの人々をベックに引き
寄せる¹²⁾。教皇ニコラウス2世(在位1058-61年)は、1059年にランフ

7) Becker, *Catalogi Bibliothecarum Antiqui*, Bonn, 1885, no. 68, item 250; no. 54, item 6.

8) R. W. Hunt, 'Studies on Priscian in the eleventh and twelfth centuries', *Mediaeval and Renaissance Studies*, i, 2, 1943, p. 206; Gibson (1978), pp. 49-50.

9) Cf. M. Gibson, 'Lanfranc's Notes on Patristic Texts', in *'Artes' and Bible in the Middle Ages*, Variorum, 1993.

10) Cf. *In Ep. ad Rom.*, PL 150, col. 115B.

11) Cf. *Ibid.*, col. 157B.

ランクスに宛てた書簡で、彼に二人の司祭の教育—弁証論理学と修辞学—を委ね、また彼の聖書研究についても言及する¹³⁾。自由学芸の教師、聖書学者としてのランフランクスの名はすでにローマにおいても認められていたのである。この時期、フランスの各地を遍歴していたアンセルムスもその名を耳にしたことだろう。彼がベックに到着したのは、まさしくこの年であった。

さて、ベックでの生活を始め、修道士となろうとしたとき、アンセルムスを襲った悩みをエアドメルスは次のように記す。「自分は修道士になろう。だがどこで。クリュニーか、ベックか。いずれにせよ自分が学問に費やしている時間はことごとく失われてしまうだろう。クリュニーには厳格な規律があり、ベックには卓越した知恵をもつランフランクスがいる。彼はここの修道士なのだ。だから自分が実を結ぶことも際立つこともないだろう。それなら自分の知識を示すことができ、多くの人々に役立つことができる場所で、自分の計画を実行に移すべきだろう¹⁴⁾」。彼には三つの選択肢があった。一つはクリュニーだが、そこでは典礼に膨大な時間が費やされ、学問が犠牲にされる。他方、ベックでは学問に時間を割くことはできるが、ランフランクスがいる限り、自分の才能を発揮させることができない。そこで、第三の選択肢として、自分が活躍できる他所に移るということになる。彼にも学問的な世界での栄達を望む気持ちがなかったわけではない。だが、彼は、それを棄てランフランクスへの服従を決意する。こうして、1063年にランフランクスがカーンに去るまで彼の下で学び、さらに彼の後を継いで、ベックの副院長となり、修道院学校での教育の責任も負うことになる。

2. 修道院学校の教育

アンセルムスの書簡には修道院学校の教育の一端を伝えてくれるものがある。修道士マウリティウスに宛てた『書簡 64』である。この書簡から、修道院学校の文法教育について幾つかの点を考えることにする。まず本文を引用する。

「アルヌルフスが文法の教授に非常に秀でていることも聞いています。

12) *Vita Herluini*, 62.

13) Cf. Southern, *Saint Anselm a Portrait in a Landscape*, Cambridge, 1990, pp. 32-33.

14) *Vita Anselmi*, l. I, c. v.

また、貴君もご承知のように、子供に文法を教えることは私には常に重荷だったし、そのために、私のところでは貴君が自分の役に立つほど文法に習熟しなかったことは私も承知しています。そこで、最愛の子に命じます。どうか彼から手ほどきを受ける書物、あるいは他の仕方から読むことのできる書物すべてについて、できる限り勤勉に文法を復習するよう努めて下さい。…私が貴君に望むことは、貴君ができる限り、とりわけウェルギリウス、そして、不道德な響きをもつものは除いて、私が教えなかった他の著作家を十分に読むことです。もし何らかの差し障りがあって彼の授業に出席できないなら、貴君がこれまでに読んだことのある書物、また読むことのできる書物を取り出し、できる時に、すべてを最初から最後まで文法の復習をするように努めて下さい」。

ここに登場するアルヌルフス（1040頃-1124年）もかつて世俗の学校での栄達を望んだ一人だったが、ベックでランフランクスから学んだ後、ボーヴェーの聖シンボリアヌス修道院の修道士となり、1073年頃、ランフランクスに請われて、カンタベリーのクライスト・チャーチ付属の修道院学校で20年間、文法教育に携わる。アンセルムスは、自分が文法を教えることが苦手だったために、マウリティウスの文法の知識が不十分であることを案じ、アルヌルフスから文法を学ぶようにと述べているのだが、ここには修道院学校の教育の典型的な方法が示されている。

文法学の教師は、その初歩を教える際、何らかのテキストを読みあげ、生徒はそれを暗誦するか、蠟板に書きつける。ついで教師は、テキストに出てくる様々な語の文法的な語形、意味を説明する。こうした一連の過程が「彼から手ほどきを受ける」直訳すれば「彼によって読む」(ab eo legere) という表現で示されている。また、上の引用で「文法の教授」「文法を教えること」「文法の復習」と訳した言葉は、「語の屈折」(declinatio, declinare) という言葉だが、教師は、一つ一つの語の変化・活用を生徒に口頭で練習させた¹⁵⁾。同じことが自習の際にもなされたことが本書簡から分かる。

こうした教育は、教師と生徒の双方にとって忍耐のいるものであったに違いない。事実、アンセルムスはそれが不得手だったと述べているが、生徒の側でも、母国語ではないラテン語の習得は困難であったことが容易に

15) Cf. J. ルクレール『修道院文化入門——学問への愛と神への希求』神崎忠昭・矢内義顕訳、知泉書館、2004年、pp.159-162。

想像できる。アンセルムスが彼の甥に宛てた『書簡 328』に次のように記されている。「私は貴君に忠告し命じます。決して怠けてはなりません。文法学の価値を知るように努力し、毎日書くようにして下さい。とりわけ散文を。また難しく書くことを好むのではなく、平易に筋の通る書き方をして下さい。他に必要がないならば、常にラテン語で話して下さい」。ここで、読む、書く、話すという語学習得のための基本的な注意がなされている。「常にラテン語で話して下さい」と述べていることから、この甥には、彼の母語（イタリア語）を使うくせがあったのだろう。

再び上記の書簡に戻ろう。その中でアンセルムスは、「とりわけウェルギリウス、そして、不道德な響きをもつものは除いて、私が教えなかった他の著作家を十分に読むことです」と述べていた。ここで彼がベックで文法を教えた際に、ウェルギリウス—おそらく『牧歌』¹⁶⁾—を教材としていたことが判明する。彼が他の古典著作家にも通じていたことは、別の書簡からも伺える。例えば、修道士アヴェスゴトゥスとの往復書簡にはペルシウスの詩句をめぐる機知に富んだやり取りが含まれ¹⁷⁾、ランフランクス宛の書簡ではホラティウスの『詩論』の詩句が¹⁸⁾、ギレンクス宛の書簡では、ルカヌスの叙事詩『内乱』の一節が引用される¹⁹⁾。「不道德な響きをもつものは除いて」という但し書きは、古典の著作の中には修道生活に相応しくない内容をもつものがあることを考えればもつともである。

3. 論理学と神学の教育

アンセルムスが、ランフランクスと同様に、論理学を教えたことは、彼が『グラマティクスについて』という著作を執筆したことから明らかである。これについて、『真理論』の序文で次のように述べられる。

「私は、かつて、さまざまな時に、聖書の研究に関する三つの論考を執筆し、それらは、質疑応答の形を取り、質問者には生徒という名称が与えられ、他方、解答者には教師という名称が与えられている、という点で同じである。四つ目の論考も、私は同じ形式で公にし、弁証論理学の初学者にとっては無益ではない、と私は考える。それは『グラマティクスについて』という表題で始まる。だが、この論考は、前記の三つとは異なる研究

16) Cf. *Ep.* 2, 84.

17) *Ep.* 20, 21.

18) *Ep.* 57, 8.

19) *Ep.* 115, 36.

に関わるため、これらの内に数え入れようとは思わない」。

ここで述べられる四つの著作は、どれも教師と生徒の対話で書かれ、修道院学校での質疑応答による教育から生まれたと考えられる。「聖書の研究」(studium sacrae scripturae)と呼ばれる三つの神学的な著作は、『真理論』『自由選択について』『悪魔の墮落について』であり、修道院長時代(1080-1086年)に執筆された。これらとは別に弁証論理学の初学者のために執筆されたのが『グラマティクスについて』である。これは、修道院学校における論理学教育のテキストとして執筆されたと思われる。R. W. サザーンは本書の執筆時期を1060-63年、つまりアンセルムスが修道士となつて間もない時期に属すると考えているが²⁰⁾、もしそうならば、彼は、こうした論理的な修練を積んだ上で神学的な研究・教育へと進んだとも考えられる。ただし、彼は、ランフランクスのような聖書註解を執筆せず、聖書の研究から生じる神学的なテーマを取り上げ、彼の最初の著作『モノロギオン』では「瞑想の模範」(exemplum meditationis)という形式で²¹⁾、また上記の三つの著作の場合は対話形式で論じたのである。

4. 瞑想と神学

修道士が、長時間、学問に専念することは難しい。ベネディクトゥスの『戒律』は日に八回の聖務日課を規定し、またベックのように経済的に恵まれなかった修道院では様々な労働がある。彼らがもし個人的な読書(lectio)・瞑想(meditatio)に専心できるとしたら、早朝か、労働の疲れを癒すための昼寝の時間、あるいは皆が寝静まった終課後である。後者の場合は灯火を必要としない夏期に限られるだろう。それでも、『戒律』の一日のスケジュールから推定すると、日に3-4時間は読書や瞑想に割くことができる。さらに、各人は、読もうとする書物を図書室から写本を借り出すのだが、一冊の本を複数で読むことはできず、当然、蠟版に自分が読む箇所を書き写し、読むことになる。実際、アンセルムスが、彼の『祈禱』『瞑想』を執筆する際に段落分けを行ない²²⁾、また『モノロギオン』『プロスロギオン』が短い章で区切られ、各々に表題が付けられているのも²³⁾、こうした点を配慮したのだろう。

20) Southern (1990), pp. 62-65.

21) *Monologion*, Prologus, 5-6.

22) *Orationes*, Prologus, 9-12.

23) *Monologion*, Prologus, 21-23.

読書と瞑想は、言うまでもなく、聖務日課を中心とする修道生活の充実、修道士の完成を目指すものだが、この読書、瞑想、祈りの生活が、同時に、神学的な思索の生成する場にもなる。事実、エアドメルスは、アンセルムスが『プロスロギオン』第2章の論証を思いついたのが暁課の最中であったと報告している²⁴⁾。それゆえ、この書物が祈禱と論証が織り成す絶妙な構成によって書かれたことも当然であろう。アンセルムスが隠修士フーゴーに宛てた『書簡 112』において、もし永遠の至福の充溢について知りたいのならば『プロスロギオン』を読んで欲しいと述べている点も注目しておこう。彼にとって、神学的な思索は、究極的には修道生活の完成である永遠の至福を目指すものであり、修道院的な靈性と卓越した思弁的な思索とが結合したところに、彼の真価があったと言えよう。

5. 修道院学校から司教座聖堂学校へ

1089年、ランフランク스가カンタベリーで歿し、4年間の空位の後、アンセルムスはカンタベリーの大司教となる。1093年のことである。

ベック修道院創設以来の55年間を手短かに振り返ってみよう。ヘルルイヌスは、修道生活における聖務日課のためにラテン語と聖書を独習した。ランフランクスの到来は、ベック修道院の知的な営みを一変させる。彼の自由学芸の知識、弁証論理学を取り入れた聖書の研究・注解は、その修道院学校の名を一躍有名にする。彼のもとで学んだアンセルムスは、論理的な思索と瞑想との総合を成し遂げる。彼らにとってこれらの知的活動は、修道生活の完成を目指す全人格な営みから産み出され、それを目的とするものであった。だが、彼らの去った後のベックの修道院学校には、もはやかつての知的な輝きはない。その光輝は、ランフランクスという、その時代においては卓越した教師、そしてアンセルムスの天才によっていたのである。ランフランクスの聖書注解も、次に述べるランのアンセルムスのそれを取って代わられる。アンセルムスの思想を継承、発展させる者がベックに現れることはなかった。その真価は13世紀に再認識されることになる。

学問の中心は次第に修道院から都市へと移動する。むしろ修道院学校とその文化がすべて衰退したわけではない。12世紀には、ドイツのルベルトゥス（1076頃-1129年）、サン=ティエリのギヨーム（1085頃-1148）そ

24) *Vita Anselmi*, l. I, c. xix.

してクレルヴォーのベルナルドゥス（1090-1153年）を中心とするシトー会の修道院神学者たちがおり、修道院文化の最盛期をもたらす。またビンゲンのヒルデガルト（1098-1179年）の名を忘れるわけにはいかない。修道院の知的な営みにおいては女性も排除されることはなかった。

Ⅱ ランの司教座聖堂学校

すでにカロリング期においても教育の中心の一つだったランの司教座聖堂学校は、1080年から1130年までの約50年間、ランのアンセルムスとその兄弟ラドルフスという二人の教師の下で神学教育の中心として栄える²⁵⁾。アンセルムスの生涯について詳しいことは何も分かっていない。彼は、ランで生まれ、カンタベリーのアンセルムスに学んだ後、ランの司教座聖堂参事会から教授資格を与えられ、その付属学校の教師となる。1080年頃から聖書註解の講義を開始し、1117年に歿する。シャンポーのギヨーム（1070頃-1122年）、ジルベール・ド・ラ・ポレ（1080頃-1154年）も彼の下で学んだ。1113年には、アベラルドゥス（1079-1142年）が神学（divinitas）を学ぶためにランを訪れるが、失望し、手厳しい批判を『わが災厄の記』に残したことは周知の通りである。

1. ランの学校の教授活動

R. W. サザーンは、アンセルムスが、午前中は、公式の「講義」（lectio）として聖書の註解を行ない、夕刻には、非公式に質疑応答による「討論会」（collatio）を行なったとし、後者については、ベネディクトゥスの『戒律』に関する9世紀の註釈書—おそらくスマラグドゥス—に見いだされる修道院の慣習を継承したと考える²⁶⁾。この討論会が夕刻に開催されたとするなら、灯火を必要としない夏期に頻繁になされ、また学生は、午後の時間を講義のノートの整理に費やし、その復習から生じた疑問を討論会で提出することができただろう。

ランに赴いたアベラルドゥスは、「講義」（lectio）からは次第に足が遠のいたと述べるが、ある日 ‘post aliquas sententiarum collationes’、彼は話の勢いからエゼキエル書の講義を引き受ける羽目になったと述べている。

25) 以下の記述は、R. W. Southern, *Scholastic Humanism and the Unification of Europe*, vol. 1, 1995, pp. 198-233; vol. 2, 2001, pp. 25-55; M. L. Colish, ‘Another look at the school of Laon’ in *Studies in Scholasticism*, Ashgate, 2006 に拠るところが大きい。

26) Southern (2001), p. 45-46.

この ‘collationes’ をサザーンは、夕刻の討論会であったと考える²⁷⁾。またアベラルドゥスは、アンセルムスを非難して「人が何らかの問題について疑問を抱き、彼の門を叩くと、その人は一層疑問を深くして帰っていくのであった。アンセルムスは、多数の聴衆を前にしているときは驚嘆すべき存在だったが、質問者を前にすると全く何者でもなかった」と記すが、これは、講義の際のアンセルムスと、討論会におけるアンセルムスについて述べていると考えることができるかもしれない。

2. 「講義」：聖書註解

今述べたように、アンセルムスの公式の教授活動は、午前中の「講義」であった。初期には文法学を教えたようだが²⁸⁾、その中心は聖書の註解だった。ここにランフランクスの影響を見い出すことができよう²⁹⁾。彼が取り上げたのは、「詩編」「ローマの信徒への手紙」、そして「創世記」の冒頭の数章、「マタイ福音書」「雅歌」であった。彼は、講義で取り上げるテキストの行間、欄外に、教父の註解の中から彼が選択した註釈、あるいは彼自身の註解を記したものをもとに講義し、学生はそれを筆記する。こうして出来上がったノートが転写されて流布する。それらは、世俗の聖職者だけでなく修道士にも読まれた。その中には、かつてパウロ書簡の全註解を行なったランフランクスも含まれる³⁰⁾。

アンセルムスの註解は、彼の指導の下に、弟子ジルベール・ド・ラ・ボレによって改訂され、さらに「詩編」については1140年頃にペトルス・ロンバルドゥス(1095/1100-1160年)によって改訂がなされる。これらは、12世紀末に完成する聖書全体に及ぶ『標準註解』(Glossa ordinaria)に取り込まれ、中世における聖書学と神学の中心的な源泉となる。

3. 「討論会」：『命題集』

夕刻の「討論会」では、午前中の講義の中から生じた様々な問題が取り上げられる。学生の質問に対して、アンセルムスは聖書および教父の著作を引用しながら解答を与える。それが筆記され、『命題集』(Sententiae)として流布する。上述のように、カンタベリーのアンセルムスは、「聖書

27) *Ibid.*, p. 45.

28) R. W. Hunt, *op. cit.*, pp. 209-10.

29) M. Gibson (1978), pp. 60-61.

30) Southern (2001), p. 33.

の研究」として真理、自由選択、悪魔の墮落の問題を取り上げた。彼は、それを対話という形式で残したが、ランのアンセルムスの場合は、その対話（討論）の部分が失われ、彼の解答のみが残されたのである。

次にその内容だが、ロッタンがアンセルムスの真正の命題としたものは、神論（31-35）、墮落前・墮落後の人間と天使（36-42）、原罪（43-46）、贖罪論（47-56）、秘跡（57-67）、徳論（68-84）、罪（85-90）、終末論（90-94）、聖人崇拜（94-97）に分類されている³¹⁾。このことから、神論、三位一体論、キリスト論などの教義学的なテーマよりは、秘跡論、徳論などのように司牧的・倫理的なテーマがより重点的に取り上げられたことが分かる。

各々のテーマを論じる場合、聖書ないし教父の著作の一節が引用され、それらの解釈や語句の説明などを通じて問題の解決が図られ、必要に応じて実際の司牧的な場面への適用が示される。M. コリッシュの指摘によると、アンセルムスは、アベラルドゥスが『然りと否』の序文において、互いに矛盾する教父たちの諸見解を吟味し、判定する方法として列挙する五点のうちの一つを、すでに自覚的に使用していた。それは、教父たちの発言が一般的なものか特殊的なものか、つまり、あらゆる時代のあらゆる教会に対して言われているのか、特定の時代の特定の教会に対して言われているのかを判断するという方法論的な原則である³²⁾。

だが、ランのアンセルムスは、カンタベリーのアンセルムスやアベラルドゥスのように、論理学を活用して抽象的・思弁的な議論を展開することはない。また個々の問題は、何らかの体系的な枠組みの中で取り上げられるわけではなく、それらを体系的にまとめようとする意図も見られない。今日残された『命題集』の写本が救済史的な枠組みで編纂されているとしても、それは彼の死後、弟子たちによってなされたものであり、彼自身がそうした意図をもっていたとは思われない。かつてM. グラープマンは、アンセルムスとラン学派に、12世紀中頃の「命題集」や13世紀の「大全」の先駆けとなる論理的・体系的な性格を与えたが³³⁾、ロッタンなどの研究は、聖書と教父の解釈に基づく倫理的、司牧的な性格をもっていたこ

31) D. O. Lottin, *Psychologie et Morale au XII^e et XIII^e siècles*, Tome V, Gembloux, 1959, pp. 32-82.

32) M. Collish, *op. cit.* pp. 13-21.

33) M. Grabmann, *Die Geschichte der scholastischen Methode* II, Akademische Verlag, 1957, SS. 136-168.

とを明らかにした。だが、こうした性格だったがゆえに、彼の学校は聖職者を志望する者たちを数多くひきつけたとも言えよう。

4. ランの衰退とパリの発展

しかし、このランの学校も次第に衰退し、パリの諸学校にその地位を譲ることになる。サザーンは、ランの学校の衰退の理由をその立地条件にあると考える³⁴⁾。ランの町は丘陵地帯にあるため、防御という点で優れており、カロリング朝の王たちもここに首都を置き、聖堂学校も教育の中心として栄えた。だが、都市として拡大しようとする、この立地条件が障害となる。商業の発展や人口の増加に応じて、空間的に拡大する余地がないからである。小都市であったことが、一定期間はランの学校の発展に有利に働いたかもしれないが、学生が増えるに従って宿泊施設、飲食物の確保が困難となる。さらに、この地で新たな学校を始めようとする者は、もしそれが聖堂参事会の意向に反する場合は排除される。学問的な競争が難しいのである。事実、アベラルドゥスがそうであった。これに対してパリは、12世紀初頭から次第に王権を強化していくカペー家の支配の中心として政治的に発展すると共に、セヌ川の交通を利用した商人たちがセヌ川北岸に商業地域を形成し、経済的にも発展していく。ノートル・ダムの聖堂学校は、9世紀に既に存在するが、1100年頃、上述のシャンポーのギヨームが助祭長・校長となることによって、次第にその名声を増す。さまざまな地方からやって来た教師、学生は、セヌ川の南岸に居住するようになる。そこは未開拓の土地が広がり、また聖堂参事会長の裁治権もそれほど厳格に適用されない地域であった。それゆえ、ここに新たな学校が建てられることにもなり、学生も増加する。むろん、彼らの宿泊施設となる土地も十分にあるし、商業の発展が必要な飲食物の供給を可能にした。以上の立地条件の相違が、一方でランの衰退を招き、他方でパリの発展を可能にしたのである。

5. ランのアンセルムスの功績と課題として残したもの

もし、ランのアンセルムスがベックで学んだことが事実だとしたら、彼は、聖書註解という点ではランフランクス、命題集という点ではアンセルムスの影響を受けたことになる。つまり、彼は、ベックの修道院学校の知

34) Southern (1995), pp. 198-204.

的な営みを聖堂学校において継承し、彼自身の教育の目的に適用したのである。その目的とは聖職者—当然、女性は排除されている—を教育することだった。それゆえ、彼の聖書註解は、説教の準備のために、『命題集』は司牧活動の中で生じる諸問題を解決するための手引きとして活用されたと思われる。この点でランの学校は、グレゴリウス教会改革の路線に沿った優秀な聖職者の養成に貢献したと行うことができよう。

しかし、アンセルムスはキリスト教神学の体系化を試みることはなかった。この体系化とそれに沿った教育は、彼の後の世代、すなわち、アベラルドゥス、サン=ヴィクトルのフーゴー、ペトルス・ロンバルドゥスなどの課題となる。ランのアンセルムスは、修道院学校と12世紀前半に展開していくスコラ学の間中に属し、一方の伝統を受け継ぎながら、他方で展開される課題を提出したことになる。

最後に一つだけ触れておくべき点がある。教皇庁を中心とする教会の中央集権化・組織化が進む中で生じる諸問題を処理し、解決するには法的な手続きが不可欠である。このための教会法の研究・教育がランでは行なわれなかった。教会法の矛盾を整理し、合理化し、体系化する作業は、1150年頃歿したポローニャの修道士、教師であったグラティアヌスの『教令集』を待たねばならない。

結 語

1265年頃、トマス・アクィナスは『神学大全』の序言で「われわれの見るところ、聖なる教えの入門者たちは、さまざまな人々の書いたものによって、却って大いに妨げられている。それは、一つには不必要な問題、項目、論証がいたずらに増加しているためであり、一つには初学者のぜひとも知るべきことがら、学習の順序によらず書物の解説の必要に応じ、あるいはたまたま催される討論の機会に応じてつたえられるためであり、一つには同じことの度重なる反復が聞く者の心に倦怠と混乱とを引き起こすためである」(山田晶訳)と述べる。彼がこう記したとき、すでに12世紀後半のアリストテレスの受容とそれに伴う新たな学問の体系化が開始され、またパリ大学に代表される大学制度は確立されていた。ここに到るまでの経過は、本稿が取り扱う範囲を越えることであろう。
